# 創立30年を迎えた「篠路歌舞伎保存会」

篠路歌舞伎保存会　会長　大髙　英男

演目「白浪五人男」　（右から）吉成数也、中村利勝、柳沢正幸、赤坂英雄、宮崎頼母

篠路歌舞伎は、明治35年4月、烈々布神社の祭典に奉納されたのが初演でした。その後、大正時代を経て、昭和9年11月まで篠路地区（旧篠路村）で演じられていました。

大正13年に士別の「名盛座」、幾春別炭鉱の「幾春別座」で地方公演をするほど盛況な時代がありました。

昭和9年に国鉄札沼線の「桑園～石狩当別」間が開通したことを契機に、篠路歌舞伎の「花岡義信一座」は、同年11月に、一座の引退興行を行って篠路歌舞伎は終わりました。

その後、50年間、篠路歌舞伎が公演されることはありませんでした。

昭和60年に、篠路の市民が待ち望んでいた「篠路コミュニテイーセンター」が開館しました。

この開館記念祝賀会の余興として、柳沢正幸さんを中心とした「ほてから座」が歌舞伎を公演しました。

出し物は「白浪五人男」でした。

この“ほてから座“の公演は、篠路歌舞伎の50年ぶりの復活公演となり、篠路コミュニテイーセンター開館記念祝賀会の参加者に大きな感動を与えました。

これが篠路歌舞伎の復活を求める大きな声となり、翌年、昭和61年12月5日に「篠路歌舞伎保存会」が創立されました。会員15人からの出発でした。

現在、篠路歌舞伎を伝承しているのは、「篠路子ども歌舞伎」です。「篠路子ども歌舞伎」は、篠路中央保育園の園児よる歌舞伎で、現在「勧進帳」、「白浪五人男」そして「忠臣蔵」の三演目をもっています。毎年、篠路文化祭などで公演し、観客に感動と感激を与えています。

## 創立30周年記念祝賀会

保存会は、平成28年に創立30周年を迎えました。

記念祝賀会は、平成28年12月5日（月）、ガトーキングダム札幌で盛大に開催されました。

### 1「記念誌の刊行」

この日、保存会では、創立30周年を記念する“30年のあゆみ”（記念誌）を出版し、祝賀会出席者に配布しました。この記念誌は　①「篠路歌舞伎」や「子ども歌舞伎」に関する記事　②「篠路歌舞伎」の古い資料や新聞記事、記録写真③篠路歌舞伎を支えた人々の顔写真、及び、④平成5年から開催された「歌舞伎鑑賞教室」のポスター等をふんだんに盛り込んだ112頁におよぶ冊子で、今後、郷土（篠路）の貴重な文献として活用されることが期待されています。

### 2「今後の活動」

保存会の活動は、従来、篠路地区を中心に活動してきましたが、これを契機に、これからは、その活動を札幌市全域に広げて、より多くの市民に知られるような活動を行い、その実績を積み重ねていくことが求められています。

講演会の開催、ビデオテープの映写会、懇談会などの事業活動を行うとともに、会員増員活動にも力をいれていきたいと思います。

演目「白浪五人男」

演目「忠臣蔵」

演目「勧進帳」

※　保存会では、いつでも会員を募集しています。

保存会は、本会の目的（篠路歌舞伎の保存伝承）に賛同する者をもって構成しています。

会員の受付けは、随時行っていますので、次のところへご連絡ください。

○ 会長宅（大髙）
TEL.011-771-1166
年会費：千円です。

# 新琴似歌舞伎復活20周年目をむかえて

新琴似歌舞伎伝承会　事務局長　宮崎（みやざき）　義晴（よしはる）

明治20年5月、新琴似へ屯田兵入植以来、今年度で開墾129年目をむかえ、今では札幌市のベットタウンとして地域は発展しております。

入植当時を振り返ってみると、日々の生活は、朝日が昇り陽が沈むまで馬と一対になり、ただただ開墾一途な生活であったことが予測されます。

娯楽と言われるような楽しさが混じ会う余裕などは乏しく、あえて申せば天候が不順で開墾の作業が出来ない日が唯一の休暇ではなかったかと思われます。

年数が経つに従い開墾も進みそんな中、両親と共に農業を目指し移住してきた一人の青年、田中松次郎さんを中心に農閑期、地域の若者が集い、日々の厳しい労働から僅かでも精神的な開放や体力の回復、発散と娯楽を求めて発祥した素人芝居が新琴似歌舞伎でありました。

当時、若者が演じる演舞は村の神社境内であり、村人を楽しませてくれたことは無論、その名声は広くひろがりました。その後、娯楽や情報の場が若松館の設置により移行し、より一層、新琴似歌舞伎が発展し、地方にもその名がとどろき「農村文化の走りよと・・島田　無響先生の脚本より一部抜粋」とまで尊ばれるようになりましたが、文明の開化は稲妻のごとく早く、その影響が新琴似歌舞伎に大きな打撃を与え、その一つである映画の出現により、松次郎さんが私財を費やし守り続けてきた新琴似歌舞伎は大正初期、新しい文明に憧れ追従してゆく流れを止める策も見出せず、惜しまれつつ終焉をむかえる運びとなりました。

平成5年7月、眠り続けている新琴似歌舞伎を再び眠りから目覚めさせるべく新琴似歌舞伎伝承会が設立され、会の目的も新琴似歌舞伎の保存、伝承を掲げ、平成8年3月、80余年振りに待望の復活初公演を果たしました。

田中松次郎

復活にむけ、会員は歌舞伎に対し知識等も乏しく、いや皆無に近い状態でしたが北区行政による財政面や資料提供などのご支援、歌舞伎に精通していた札幌在住の指導者に恵まれその指導を仰ぎ、また地域住民の理解と協力など、多くの方々による多大な尽力が結集したお陰で復活公演を果たすことができました。

歳月の流れは早いもので、新琴似歌舞伎が復活して早20年が経過しました。

この20年間を二つに分けて振り返ってみますと、最初の10年間は歌舞伎の知識を学んだり埋もれていた新琴似歌舞伎のPRに時を主に費やした期間と言えます。

歌舞伎用語も乏しく、台詞の覚えや言い回しがままならず、また演技力においては何度も指導を受けてもなかなか上達や身に付かず、指導者を悩せたものです。悪戦苦闘を繰り返しながら何時の

日か、会員各々の努力が実を結び、力量は十分とは申せませんが、ようやく形も身に付き、慰問の依頼を受けると馳せ参じたり、また幾度となく記念行事への出演など大きな舞台で何度となく披露するまでに成長しました。

会員も徐々に増え、自己満足ではありますが演目も「仮名手本忠心蔵」などを演ずるまでに力量が備わってきました。

この10年間は、総じて申せば苦悩と試練の期間であった気がします。

さて後半の10年問は、前半の苦悩や試練の反省を礎に伝承会の目的であります、先人が築いた偉大な伝統芸能文化である歌舞伎の伝承と後継者の育成へ力を注ぐ期間へ移行したように思われます。

その最たる活動が、平成14年度から学校側の寛大なご理解とご協力の上、開始した市立新琴似中学生（1年生～2年生）対象の歌舞伎講座の開催です。

現在では年間教育カリキュラムのなかに編成されるまで発展し、平成28年度で10回目を迎えました。

この歌舞伎講座開催のねらいは達成される為に実技体験等を通し「1. 新琴似の開墾の歩み（歴史）を伝え知らせ、郷士に対する関心や愛着心に努め、地域の一員としての自覚を育む。2. 地域の伝統芸能としての『新琴似歌舞伎』を観劇し、その歴史的（開墾時）に果たしてきた役割を学び共に伝承活動へ興味や関心を高めてゆく。3. 自ら歌舞伎の実技や関連の指導へ参加し、歌舞伎の醍醐味を味わい、その造詣を学ぶ。4. 日本古来（固有）より伝え告げられてきた伝統文化・芸能へ関心をもたせると共に、そのなかに秘めたる礼節の一端を諭し、身につくよう、育む。5. 共に励み充実感を味わう」とし、数多いねらいではありますが、毎年取り組んでおり参加する生徒には新鮮な体験となり、保護者や学校側にも好評を頂いております。

中学生の実技体験の演目は、衣裳や小道具等の準備の関係上、歌舞伎演目でよく知られている「青砥稿花紅彩画＝通称・・白浪五人男（浜松屋と稲瀬川勢揃いの場、各一幕一場）」です。かつては会員と共に演じておりましたが、近年では演ずるも生徒、演ずる生徒を助ける裏方も生徒達が会員の指導を受け、その都度、舞台で見事な出来栄えを見せてくれており、今後もこの歌舞伎講座は継承してゆく所存です。

伝承会会員から指導を受ける中学生

さて平成28年度は新琴似歌舞伎復活20周年記念事業開催の年度で、この記念行事は、中学生と伝承会が共に手を携え歩んだ集大成の事業です。

現在、この大きな記念事業が達成されますことを願望し、会員一同、心を一つにまとめその準備等に日々邁進している次第です。今から心が躍っております。

この記事が出版される頃にはきっと記念行事が滞りなく終了され、また一歩前進のスタートが始まったことがご報告出来るでしょう。

平成28年度新琴似歌舞伎復活20周年記念公演

**新琴似歌舞伎伝承会では新規会員を募集しています。年会費は4,000円です。詳しくは下記までお問い合わせください。**

○ お問い合わせ

新琴似歌舞伎伝承会
TEL.011-764-8804
（プラザ新琴似内）

# あさぶ亜麻保存会

## ～亜麻から広がるまちづくり～

あさぶ亜麻保存会　事務局長　喜多（きた）　洋子（ようこ）

麻が生まれる町と書いて「あさぶちょう」。むかし、亜麻の茎から繊維を採る工場があったことから町名がつきました。その歴史を伝え、亜麻をとおして麻生の人たちの交流を図ることを目的に活動しています。

毎年、麻生地区の街路ますなどに観賞用の亜麻を植え、みなさんに亜麻に親しんでいただく活動を中心に行っています。今年は、アカシア通りの亜麻がとてもきれいでした。

亜麻の花

### 活動のひろがり

今年で2年目になりますが、麻生地区防犯協会の協力を得て、早朝に地域のパトロールを行いながら、ゴミ拾いと街路ますの亜麻に施肥を行ってくれています。地域の方たちが、亜麻の花をきれいに咲かせようと力を貸していただいていて、とてもうれしいです。

また、亜麻保存会の会員がいるマンションでは、6月に、第1回目の亜麻まつりを開催してくれました。マンションの花壇に亜麻を植え、きれいな花を咲かせ、亜麻の歴史を知る機会をつくろうと、亜麻工場の歴史ある写真などの展示もしてくれました。当日は、50名の住民の方が参加されたそうです。

### 小学校での授業

今年も和光小学校4年生の総合の時間で、亜麻についてお話する機会いただきました。

毎年、熱心に話を聴いてくれ、質問もたくさんしてくれました。亜麻の育て方についての質問だったり、他にどんな色があるかなど、とても興味をもってくれていて、うれしかったです。今年は、「もぐらとずぼん」という、もぐらが、いろんな動物たちの協力を得て、亜麻を育てて茎から繊維をとり、ズボンをつくるという物語を読み聞かせしました。亜麻の繊維やその製品（リネン製品）も持っていき、触ってもらいました。お礼のお手紙をひとり一人書いて送ってくれ、子どもたちの想いをたくさん受け取ることができ、うれしかったです。子どもたちと指導している先生に感謝です。亜麻がだんだん子どもたちに広まってきて、東京からきたお客さまに「麻生の自慢できることは何？」と聞かれて、子どもたちが亜麻の花だと、亜麻の花をお客様に教えていたそうです。

授業の様子

### 亜麻の茎から繊維を採る

2016年3月に、一年草の亜麻の茎から繊維を採り、その繊維を紡いで糸にしようというイベントを行いました。街路ますに植えている亜麻の花は、宿根草で茎は繊維にはなりません。

「あおやぎ」という一年草の亜麻が、茎から繊維が採れる品種で、まちづくりセンター隣りの麻生緑地公園と和光小学校の中庭に植えてあります。その亜麻を秋になったら、会長宅の庭先で干して、水に浸し、また干すという作業を行い、茎から繊維を採りました！水に浸したときに出る悪臭は、バイオの力でなくし、臭くはありませんでした。

亜麻浸水の様子

### 麻生でできた亜麻から糸に！

植物から繊維が採れ、それが糸になるのは、感動でした。

繊維を採るための道具や足踏み紡ぎ車は、江別で亜麻の栽培からリネンの布作りを行っている「工房亜麻音」の小野田由美さんに持ってきていただき、糸紡ぎの講習会も行っていただきました。繊維以外の茎を砕く作業は、砕くことで中から糸がでてくるのがとても楽しくできました。さらに、ブラシで梳（す）く作業が、繊維が切れてしまって、なかなか根気がいる作業でした。足踏みの糸紡ぎ車で、糸を紡いで、「麻生産の糸」ができました。

その糸で、後日、織り機を使ってコースターを作りました。

亜麻を干す作業

砕く作業

すく作業

糸紡ぎの様子

### 亜麻の記録誌づくり

2015年度に、同年度から5年間の札幌市のまちづくりに関する施策の指針となる中期実施計画（アクションプラン2015）が策定され、北区では、地域活動を活発化する環境づくりを目指して、「北区の歴史資源を活用したまちづくり」に取り組むこととなりました。その取組の一つとして、2016年から、北区の亜麻に関する歴史を伝承するための記録冊子を作ろうと準備が始まりました。北区地域振興課の支援を受け、あさぶ亜麻保存会のメンバーとさっぽろ青少年活動協会が協力をしてくれ、亜麻記録冊子作成実行委員会（会長　宮崎正晴）を立ち上げました。子どもたちに歴史をつなぎたいとの思いから、小学生の副読本になるような冊子を目指して、取材などをしています。実行委員会には、和光小学校の先生や麻生に親交の深い元新聞記者の方にも加わっていただいています。亜麻工場のあった敷地の外側（麻生町1丁目から8丁目）をブラタモリのように、昔の地図をみながら歩いたり、工場にいた方を訪ねていって、取材をしています。子どもたちのこころに響く冊子ができたらいいなと思い、実行委員会を重ねています。

### まちづくりへ

亜麻の花を植えて、歴史を伝える活動が、亜麻保存会のメンバーだけでなく、地域の方たちに根付き、たすけあいにつながっていくといいなと思います。今、まちづくり協議会や町内会、麻生に住んでいる方、商店街や企業の方、亜麻に関心がある方などから、会費をいただき活動をしています。地域にお花を広められるのも、みなさんの温かい応援のお蔭です。一年草の亜麻は、ゴマのようなちいさな種から可憐な花を咲かせ、茎はとてもしなやかです。地域のちいさな力から、あたたかい社会をつくり、亜麻の茎のように、今後もしなやかに活動をしていきたいと思います。

麻生緑地公園の亜麻

**あさぶ亜麻保存会では会員を募集しています。年会費は個人が一口1,000円、団体が一口2,000円以上となっています。関心のある方は下記までお問い合わせ下さい。**

**○ お問い合わせ**

**あさぶ亜麻保存会**
**TEL.011-728-3700（café亜麻人内）**
**070-5048-4050（喜多）**

# 復活！新琴似大根

## ～すごいぞ！ぼくらの新琴似～

札幌市立新琴似小学校　校長　小川（おがわ）　以心（いしん）

**【はじめに】**

昭和35年頃まで、新琴似は、豊かな農村地帯でした。名産「新琴似大根」は、札幌一円に出荷されていました。「新琴似たくあん」も有名でした。「ファーム村田」の村田拓一さんの協力を得て、「新琴似大根」を復活しました。

**【新琴似大根の始まり】**

新琴似の開拓は、明治20（1887）年５月20日に、九州の士族を中心に屯田兵146戸が第１陣として入植したことに始まります。

新琴似小学校は、その年の12月３日に「私立新琴似小学校」として開校しました。平成29年に開校130周年を迎えます。

「新琴似七十年史」によると、明治23年頃、屯田中隊長安東貞一郎大尉が、自給を目的として大根の種子二合ずつ兵村各戸に配布したとあります。地味が適していたので非常に大根がよくできたようです。当時、篠路兵村（現屯田）の方が、すでに大根の産地として知られており、札幌から下肥を運んで、作った大根を札幌で販売していました。しかし、明治31年の大洪水のため篠路大根が打撃を受け、これ以降、新琴似大根がよく売れるようになりました。

新琴似大根は、「大根馬車」に積まれ、５丁目通り、通称大根通りを通って、札幌市内のお得意さんや二条市場などに運ばれました。最盛期には、耕作面積２百ヘクタール、生産本数８百万本、当時の金額にして、１本８厘、総額10数万円の利益になり、大正から昭和初期にかけて、新琴似大根の黄金時代を迎え、その名は全道に知れ渡りました。しかし、昭和30年代になると、新琴似地区の宅地化により、畑は宅地へと転換していきました。

新琴似で最も広く栽培された品種は「宮重大根」で、愛知県春日町宮重が原産とされています。宮重大根は「青首ダイコン」のルーツで、現在は「宮重総太大根」などとして広く市販されています。生食・切り干し・漬物に適し、首の部分の強い甘さが特徴です。第二次世界大戦後、病気による打撃や嗜好の変化による消費量の減少により、生産されなくなくなりました。平成４年に「宮重大根純種子保存会」が設立され、宮重大根が復活しました。

**【新琴似大根の栽培】**

今回、宮重大根の原種子を５年生の児童と栽培し、かつての新琴似大根を復活したいと、学校の南側で農業を営む「ファーム村田」の村田拓一さんに協力を要請し、実現の運びとなりました。

宮重大根純種子保存会から原種子の宮重大根の種子を取り寄せてくださいました。「漬物用大根は、昔から８月７日の七夕頃に播種しなさい」と伝えられていることから、平成28年８月６日、地域の方々にも参加していただき、児童の手で約30平方メートルの畑に約100本分の種子を植えました。

５年総合的な学習

**「すごいぞ！ぼくらの新琴似」10時間扱い**

**【単元のねらい】**校歌に「あの道　このうね　明治のはじめ　ぼくや　わたしの　ご先祖が　命をかけて　開いたところ　新琴似」とフレーズがある。本単元は、新琴似大根にまつわる歴史に触れることを通して、地域への誇りや愛着を培っていきたい。

**【単元計画】**○「新琴似大根」って知っている？　○どんなふうに育てていたんだろう？　○昔の新琴似ってどんな地域だったの？　○大根はどうして作られなくなったのだろう？　○新琴似大根にまつわる昔の人のすごさをまとめよう　○地域の人のすごさを伝えよう

**【新琴似大根の収穫・たくあん作り】**

10月22日に大根抜きをした児童は、「自分で植えて、自分で抜いた大根を食べるのが楽しみ」と話していました。収穫した大根は、10月31日の学校給食で「けんちん汁」として、全校児童で味わいました。「いつも食べる大根より、おいしかった。」「収穫の時、生で食べたら辛かったけど、けんちん汁で食べたら甘くておいしかった。」児童の感想です。

新琴似大根は、漬物にも加工され、「新琴似たくあん」として札幌だけでなく、炭鉱などにも送られていました。

明治末から大正にかけて、三番通りで大根の耕作をしていた、初代の村田喜市さんが自宅物置でたくあんを作り、販売したのが新琴似の漬物加工の始まりと言われています。大正12年に、２代目の勇さんが、四番通りにあった「新琴似歌舞伎」の常設劇場「若松館」を解体して運び、漬物倉庫に建て直しました。直径２メートルの漬物樽が並んでいたといいます。この頃、「大根干し」「大根すだれ」が新琴似の風物詩でした。

そこで、５年生は、大根を干し、たくあん作りに挑戦しました。初めての体験です。たくあん漬の重しは、村田さんから、加工場で使っていた「たくあん石」を貰い受けました。

新琴似を歩いていると、大根を植えている家庭菜園や「大根すだれ」を見かけました。新琴似大根は今も引き継がれていると実感しています。今回は、「宮重大根の原種子」にこだわりましたが、それぞれの土地や風土に改良された「宮重大根」が市販されています。かつての名産品であった「新琴似大根」が、新琴似地区の小学校や家庭菜園に広がることを願っています。

○ お問い合わせ

新琴似小学校
TEL.011-761-3178

# コラム①　藍栽培の歴史を伝える

明治時代、現在の篠路地区を中心とする一帯では、産業として藍の栽培が盛んに行われていました。北区役所では、この歴史をまちづくりに活かすために様々な取り組みをしています。

今回はその中から、小学校で行っている「藍栽培の歴史について学ぶ授業」を紹介します。

## ＜藍栽培の歴史を伝える授業＞

この授業は、生徒たちに地域の歴史を学び、愛着を持ってもらうことを目的として毎年行っています。平成28年度は、鴻城小学校と篠路西小学校で授業を行いました。

授業ではまず、地域の発展に尽くした先人たちの働きについて講義を行い、その後、地域で実際に藍染を行っている団体の方々にご協力をいただき、ハンカチの藍染体験を行いました。

歴史の講義（篠路西小学校）

藍染の様子（鴻城小学校）

### ＜北区における藍の歴史＞

明治時代、徳島県から入植した人々が、困難を極めながらも土地を開墾し、徳島県の特産物である藍の栽培・染料への加工に成功、やがてその品質は日本一と認められます。のちに価格の安い化学染料に押され衰退しますが、その歴史は「あいの里」という地名や「英藍高校」の名前などとなって現在に残っています。

完成した藍染のハンカチ（鴻城小学校）

【お問い合わせ】　北区市民部地域振興課　TEL.757-2407